

私にとって言語文化教育とは何か

ことばによる出会いの旅

入学前レポート「私にとって日本語教育とは何か」から

大西博子

「日本語教師になろう」そう決めたのは大学3年の夏休みだ。大学の日本語教育の講座受講と想定だなんてなく軽くふみこんだ教室、「総合」との出会い、わたしにとって今までの価値観をくつがえすような大きな出会いだった。

1. 内なる対話

まず私は自分の考えを日本語で「表現すること」以前に「考えをもつこと」の難しさにであった。「私はいったい何がしたいのか？」紙1枚にわたしの考えを綴る行為がいかに難しいと思ったことか。実は、そのとき自分ですら自分の考えていることがわからなかったのだ。それに、一般的な考えではなく「わたし」の考えをきかせてほしいといわれたときに、わたしは本当に不安になってしまった。わたしは何も考えてなかったのか。

しかし、落ち着かせて自分の中で、経験や関心を探りよせて、内なる対話、ことばで自分自身の考えを探ってみた。普段問うことのなかった自分自身の中にあるなにかしらの経験、感情、思いを探ってみた。探ってみると次第に「つたえたいこと」や「考えること」がうかびあがってきて、表現することで、それと同時に、新しい自分に出会うことができた気がした。

2. 外なる対話との往還の中で

しかし、わたしが考えることができるのは、他者とのかわりにおける経験があるからである。「総合」の教室の中で常に他者と向かい合って、インターアクションを行った。そのたび他者との価値観の「異なり」がわたしの思考を変容させた。その「変容」のたびに、わたしは、思考をさぐらなければならなくなり、また「内

なる対話」をおこなった。そのたびに変容するわたしの立場をさぐっていくことができた。そうすると、あたりまえだと思っていたわたしの既成の価値観が崩壊して、新しく自分の考える意見に出会うことができた。「教室」という小さな共同体の社会関係における「他者」との関係の中で、変容し築き上げられる、新しい「わたし」の立場や価値観に常に対面することができた。

3. 出会いとは

教室でのインターアクションの中で活動をつみかさねていく中で、ひとりひとりが、新しく価値観をぬりかえ、かつ変容を与え合う中で互いの新しい一面、自分の新たな一面を知ることができ、それと同時に、心のそこから仲良くなれることができた。そういう、「わたしらしい」ひとりひとりがふれ合い、出会い親しくなっていく社会形成の場として教室があった。わたしは、教室がダイナミックな「わたしらしくともに生きる」社会形成の場として創られるのを感じた。

「出会い」とひとことであるが、その「出会い」はただ会って顔をあわせて話すことではないと考えている。内なる「ことば」での対話と外なる「言葉」での対話を繰り返す中で「出会い」は「わたし」に対して、そして「他者」に対して継続的にあるつづけるのではないだろうか。社会関係を構築していくなかでのインターアクションは常に「わたし」の変容をおこす。(外なる対話)しかし、その関係における変容しつづける「わたし」の立場を常に自覚すること(内なる対話)を繰り返すことで、他者との関係の中で自分らしさを構築していくことができる。

わたしはかつて、親や周りの意見に左右されて自分の道をきめていた。他者の築く価値観の鋳型におさまろうとしながら、でも、自分の立場をもてなくて、なんだかとても窮屈だった。しかし、「総合」にであってから、このように対話し、自己の社会関係における変容と価値観の更新を積極的に自覚することを考えるようになって以来、いつも、なにかしら、「他者」の価値観や考えに対して、自分の立場をみつけていこうと努力するようになった。社会の関係の中で、ゆれうごく価値観に対して、それをしっかりと自覚して、今、そこにいる「新しい自分」はなにかと問いかけることをはじめた。いつも自分自身が他者の価値観にあわせるのではなく、自分はどういう立場をとるのかというアイデンティティをもつことを意識するようになって、わたしは以前よりも、少しだけ、強くなったかな、自立してきたかなと思う。(はたからみるとまだまだかもしませんが)そして、それこそが「わたしらしく、他者と共に生きる力」なのだと思う。

教室という場もひとつの社会である。その社会においても、他者と他者とがふれあい、価値観のぶつかり合う中で、互いに変容する。その係わり合いの中で「立場」を主体的に形成していく。そのために「内なる対話と外なる対話の往還の中でことばをまなぶ」ことを通して「わたしらしく他者と共に生きる力」をめざした教室創りをしたいのだ。教室という小さな場も「ことば」による生き生きとした社会形成の場であるべきなのだから。この考えは無論これからふみだす日本語教育の世界の中で変容していだろう。そこにはたくさんの人々の価値観との出会い、また自分自身の更新されゆく価値観との出会いが継続的にありつづけるのだ。だから常に私自身も「内なる対話」と「外なる対話」を繰り返して自分自身の立場を形成していかなければならないだろう。

そんなわたしにとって、日本語教育とは「ことばによる出会いの旅^{*}」だ。

2. 対話レポート

わたしは2学期の終わりぐらいから自分の卒業論文や卒業に必要な単位のためのテスト勉強にいそがしくなった。そして冬休みになって、次第に体の調子をくずしてしまった。

テストだけはうけなければ卒業できないと思いなんとか学校に通っていたけれどもテストは終わったとたんに福岡の兄の病院に入院をすることになった。

その頃から急に自分自身の中の内側からあふれてくるような院での研究に対する希望や研究の動機がうすれてしまったような感じがした。2週間ほどたったころに、わたしは、本当に不安と葛藤におそわれてしまった。急に自信がなくなってしまったのである。自分には、研究なんかできないんじゃないかという先の見えない漠然とした不安におそわれて、大学院をめざしていたころの気持ちとはまったく反対の気持ちになってしまった。

病院にはパソコンがなかったために情報がまったくはいらなかった。今まで毎日のようにはいってきた研究室からのメールや情報から離れてしまって、すっかりした何もない毎日なのか、それとも、考えることをやめてしまったのか、最初は何もわからなかった。

「何も考えない状態のわたし」に気がついたのは1ヶ月過ぎた頃だった。はじめ総合のクラスを体験してから「わたしにとって」という命題で考えることをなぜ

^{*}旅というのは継続的であるということであらわす。出会いというのは「自分」との出会い、「他者」との出会いをさす。ことばは内言と外言を往還するものとして広くとらえてほしい)

かずっと意識的に継続していた。入院すると決まったときも、日本語教育や英語教育、言語教育関係の本を毎日読もうとして、横に並べていたのに、なぜだろう、一日一日すぎるうちに、その気持ちが起こらなくなってついに、「何もかんがえていないわたし」に気がついたのである。「将来日本語教師になろう」という気持ちさえも次第に希望のない色あせた夢だったのかと思うほどに以前のような前向きな気持ちがおこらずにただぼんやりと毎日をすごしていた。好奇心や何かに対しての問い、関心をもつことのない毎日であった。

こんな状態でわたしは研究なんかでできない・・・そう思う気持ちがはっきりと感じたのは、一時的に東京にかえってからである。研究動機としての「研究したい」という内発的な動機がわたしからとおざかっていたのであった。

「しばらく休学させてください」とついにメールをうってしまった。「わたしが」生きているという感じのしない毎日だった。「主体的に生きていきたい。・・・」そう思った動機文を読めば読むほど、今の自分の状態にため息をついてしまった。

卒業の前日に先生がメールをくださった。「誰も主体的に生きることなんてできない。そういう意味ではみんなつらいんですよ。それを楽しくするのが研究だと思えばいいんですよ」

わたしは、そのメールをひとりでもよんで考えてみた。実は最近ずっとパソコンをみる勇輝さえ失っていたのである。問題意識をうしなっているわたしがいる。そのときははっとしてかんがえたのだ。この「問題意識をうしなった」状態のわたしになぜを問ひ掛けることを忘れていた。この自分自身の状況のなぜを問うことからはじめるべきなのは・・・と思ったのである。

1、なぜ研究意欲をうしなっていたのか

考えてみるとわたしは、「いま、まさに、ここで」わたしが立っている場所（問題意識の喪失）から目をそむけていた。どうして、この不安になぜをといかけることをわすれていたのか、今思うとわたしは「今の自分」の立場をまっすぐみつめることをしないで「考え悩む」葛藤から逃避しようとしていたのかもしれない。今始めて、自分を見つめなおそうと思う。

わたしは病院で兄とたくさん話をした。あまりに将来のことを悩み、ぼんやりとしているので兄が心配してくれたのである。

「人生は自分探しの旅やで。おまえの道をおまえが切り開いていくんやぞ。でもみんな20代の頃って悩むな。多分、迷いながら自分がどういう生き方をしているのか考えてほんま手探りなんとちがうかな・・・みんなそうやと思う」

そういうわたしの兄の言葉をきいて「自分を探す」とはどういうことかと思った。ほんとうに自分がしたいなと思った仕事をするを求めて「ほんとのわたしは日本語教師がしたいんだ」と思っていたのに、また、「自分はこういう研究をしたい」とおもっていたのに、いま、まるでそれが幻想であったかのように「自分」が何をしたいのかわからなくなっている。

「自分を探す」とはどういうことか、また「わたしの道を手探りで探っていく」とはどういうことだろうか。「自分」をしろうとしても、「自分」とはいったいどういう存在なのか。それがいつも言葉でうまくあらわせないしわからない。むしろ、わたしは人とかかわりの中で「自分」というものが場所的に変化していると感じる。学校でのわたし、日本語教育の先輩とのわたし、友人といるときのわたし、勉強しているときのわたし。状況によって、環境によって、「わたし」はいろんな「わたし」になっている。

しかし最近その「わたし」を問おうとしていないということに気がついた。とくに病院での毎日、身近な日本語教育の現場に近かった環境やその情報から遠のいてしまったわたしは孤独な状態で、人とのコミュニケーションから遠ざかってしまっていた。どれが本当の「自分」がわからなくなっていた。生きているのに、「わたしが生きている」という実感がわからない。

「考えるための日本語」でコミュニケーションについて学んだことを思い出した。

自己というものは他者との相互作用の中で関係性の中に見出されるものだ、まるで鏡のように自分というものは、他者をとおして知るのだ、と学んだことを。

そうだ。今わたしは、ひとや出来事とのコミュニケーションをかわしてない。「ことば」をうしなっていたのだ。「ことば」が結ぶわたしの関係世界をうしなっていたのだ。

兄のいう「自分探し」や「手探り」とはなんだろうか。遊牧民は目の前に広がる土地（環境）をよく探求することで「自分の場所」そしてすすむべき方向をきめる。探求するものもそうだ。つまり、周りとの人とのコミュニケーションやかかわりの中で「わたし」がいかなる存在なのか刻々と変化している。そう、絶対的な存在ではなく、わたしは関係世界との相対関係の中こそ「わたし」を感じる事ができ

るのだ。いつも「ことば」で関係する「わたし」の関係世界の中でこそ、「自分の生き方」や「アイデンティティ」を探るということとなる。

「わたしの研究」もそうではないか。今までの「勉強」と異なり、既成の知識を多く積み重ねることではなくて、研究とはいまだひらかれていない眼前にひらかれた未知の世界をきりひらいていく「知的探求」のようなものだと思う。その研究の主体が「わたし」であろうとするためには、ただ「わたし」だけをみつめてもできない。まわりとコミュニケーションで関係をもたないままに、わたしの中からかつてにその動機がうまれるものではないと思うのだ。今その「わたしの問題意識」というものを、今失っているのは「学びの環境」として、今まで親しんできた、コミュニケーションしていた仲間とのかかわりからはなれてしまったからなのだ・・・とはっと気がついたのである。今まで当たり前のように、日本語教育の研究をしている先輩や先生とかかわり、そういった学びの世界にいた。その中で「わたし」になぜを問い、思考することにおわれていた。それが時として、苦しくなったり、研究室にはいったら、もっとこの苦しみは大きくなるんだろうなとうんざりしていた。

しかし、その環境からはなれ「わたしが学ぼうとしている」という「わたし主体の研究意欲」をうしなっていたとき、この喪失感の苦しさ、「わたしが生きていない感じ」が「考えること」の苦しみよりも、もっと、大きくて、まるで自分がいなくなったような不安につながっていることに気がついた。いくら「考えること」が苦しいといえども、この喪失感の大きさにくらべれば、ぜんぜん楽しかった。当たり前のように通っていた「教室」という学びの「環境」がいかに大きな存在だったかを私はしった。

2. 「主体」って

「誰も主体的な生き方はできない。みんなつらいんですよ。あえてそのつらさを楽しさにかえていくのが研究だとおもえばいいんですよ」

東京にかえてから、先生からのこういった返事をよんで「研究」に対しての気持ちあらためて考え直した。

「主体的な学習」、「主体的な教室活動」「学習者主体」、「主体」という言葉が本や情報の中でたくさん飛び交っている。わたしも、頭だけで理解しようとして安易に、その言葉をつかっていた。そして病院で、ひとりで「わたしは」「わたしにとって」という命題でさまざまな言葉の定義をかんがえようとした。しかし、わたしは、一人になればなるほど、その「わたし」がつかめなくなってしまっていたのである。

「主体的」に…という言葉の意味にふくまれるのは、確固とした「わたし」のアイデンティティを保持しながら、「わたし」の強い意思と能動的な姿勢で環境に働きかけることだと思っていた。しかし、先生は「誰も主体的な生き方なんてできないんですよ」という。わたしたちは、みな環境の中で揺れ動く自己の不完全性をしりながらも、どこかでいつも安定する人間関係や自己を求め「主体的にいきたい」と求めようとする性質があるのではないだろうか。しかし、それが完全に「主体的に生きられる」ことはむりなのではないだろうか。なぜなら環境も「ひと」も変わり続ける存在だからだ。

人はみな、その変わりつづけるあらゆる環境の中で揺れ動く自己に、葛藤に翻弄されながらも、いつも「主体的なわたし」を求めようとするのだ。しかし、完全に絶対な、不動なそれを得ることはできないのだと思う。わたしたち人は環境や状況によって自分の生き方にたえず葛藤や不安を感じ、そこで新しい自己を発見したり、他者からさまざまな生き方を学んだりする。ひとつの固定したような「わたし」をどこまでもつらぬきとおすことはできない。他者にあわせようとしたり、しかし、そこで自己を失うことからの不安から、また自分探しをしたり、人はその連続の中でいつもあらゆる環境の中でその中で常に自己を探しているのだと思う。

「主体」という言葉は「孤独」な状態では求められない。それは人とかかわりの中において求められるものである。それは他者や出来事と私の出会いの中で「ことば」をかかわし、そのときに起こる疑問と葛藤、そういった精神のゆさぶりの中から生まれる「関心」をもつことからはじまるのだろう。だから、いつもさまざまな「わたし」の姿をみつけていく。主体的にいきるとは、「わたし」がいつも安定して、「わたし」を把握し、どこまでもそれを持ち続けることではない。それが簡単にできるならば、わたしたちは「ことば」をかかわすこともないし、考える必要もないのだ。むしろ他者とかかわりの中で、環境の変化、新しい世界に対する疑問や葛藤に心をゆさぶられるときに、「わたし」の内側からあふれるような「思考」がうまれてくる。その「ことば」を媒介にして、主体としての「わたし」をたえず探していこうとする姿勢や過程ではないかと思う。絶えず変容している世界の中でわたしたちは係わり合い、その係わり合いの揺さぶりなかで「ことば」は生まれる。「ことば」が生まれる場所には「関心」や「好奇心」が生まれる。そこに「わたし」への問いが生まれるのだ。

「わたし」のなかで「ことば」の「意味」さえも絶えず変化しているものだ。たとえばこの「主体」ということばの意味づけさえも、今考えているうちに、具体的な経験や思考をとおしてこそ、その意味は「わたし」にとってより鮮明な意味をも

ちはじめた。この意味が絶対的に他者にも同じ意味をもつことではなく、「わたし」の中でこういった意味に変化していった気がする。まるで「ことば」は生きている。「経験」をとおして、固定的にとらえていた「ことば」の意味が、もっと、実感のある「わたしにとっての意味」をもってきたように感じる。「主体」ということばがわたしの中で単なるうすっぺらい「言語」ではなく生きた経験をとおして新しい意味付けをもって編みなおされた。そのようにしてわたしたちは「世界」をとらえ、「ことば」の意味を編みなおしているのかもしれない。

もう一度いうならば、わたしにとって「主体的に生きること」、それは口では簡単にいえても、人は、それを簡単に得ることはできない。いつも揺れ動く関係世界の中で「わたし」を失いそうになったり、新しい「わたし」をみつけたり、その生まれてくる思考の中で「わたし」とは何かを求める姿勢なのだ。「ことば」が生まれるところには「わたし」と「世界」との関係が揺さぶりをもち続けている。そこに「主体」を求める心が生じる。「主体」という言葉は動機でいう「わたしらしさ」といいかえてもいいかもしれない。つまり、一人では「わたしらしく」いきていくことなんてできないのだと思った。むしろ「他者」とのかかわりの中で「ことば」をかわし、そこではじめて「わたしらしさ」をみつけることができる。「わたし」は「他者とともに生きて」はじめて「わたし」をもつことができる。

わたしがなぜ「わたしの研究動機」を失ったのか。それはまぎれもなく「日本語教育を学ぶひとびと」からとおざかっていたからなのだ。

3. 教室という場所

わたしが研究意欲を失ったのは、冬休みにはいって「教室」（研究室もふくめ）という場所からとおざかった時期にちょうど重なる。大学4年の間に毎日「教室」に足をふみだして、そこでことばをかわした。その中でわたしはいつもどきどきした好奇心と研究意欲をもらっていた。この「環境」それがいかに「研究」および「学び」にとって重要だったのか。その環境にはたとえ教科書や本や特別な知識がなくても、そこには、人の「ことば」がたえず創造的に生成されていた。だからいつも「思考」していたのだ。こうかんがえて見ると「教室」がわたしに与えていたものの大きさをふりかえることができる。教室という環境にいる一人一人の学習者から生まれる「ことば」がどんなに大きな好奇心をわたしにあたえてくれたのか。研究室の先輩のメールや情報にたえず出会うことが、どんなにわたしに「関心」や「好奇心」をおこしていたか。

「学び」とはひとりではできないものではない。「ことば」を学ぶということは、「ことば」を言語としてみつめることではない。「わたし」と「ことば」との関係、あるいはひととの関係の中で、人を知り、「ことば」を知り、自己をしり、世界の意味を編みなおしていく、その過程に自然に考えることばが生成され表現され「生きたことば」がわたしの口から生まれる。

4. ひとの中で

わたしは「ひと」の中で生きていること、人とかわり生きていくことの大切さを身にしみて感じた。ひととのコミュニケーションの中で「わたし」がはじめて主体的に生きようとする希望や好奇心をおこされるのだとした。

言語教育の世界において、「学び」「教育」観が社会的な構成主義の影響で変化している。しかし、その変化や「コミュニケーション能力の育成」という言葉がとびかうようになったのは今にはじまったことではない。コミュニケーション中心の英語教育、主体的学び、そんな決り文句がすでにうすっぺらい「知識」として教育学部の一斉授業の中で安易に「伝達」されてしまっていた。疑われることなく、大量生産させ「伝達」されている。教育学部ですごした4年間で、いくども「コミュニケーション能力」「学習者主体」ということばを何度も耳にしながら、それを「情報*」として、わたしは頭の中に蓄積しようとしていた。実践、経験のない「知識」「理論」をもって疑うことなく教職をもらおうとした。

日本語教育の勉強をはじめて「生きた教室」に足をふみこんだならば、それらの「情報」をこえる「経験」がわたしに、それらの決り文句の意味を「わたし」にとっての経験をとおした「意味」に再編成される。「経験」や「実践」によって「知識」「ことば」の意味をわたしが編みなおすることができるのだ。そこではじめて教師としての自覚がうまれるのだろう。教育の研究は「実践」「経験」ぬきにあることはできない。これからは「教室」の中で「ひと」とむきあい「ひと」の中で「経験」する中で、「わたし」がそれらの「知識」の意味の編みなおしをしていくべきだろう。

「ひと」と向き合うことについて兄がメールをくれた。

病人をみるようになって、俺の中で医学の世界がひろがったと思う。学んできた医学的な知識だけでは計れん重みをもって、失敗もしたし、緊張もしたりする。でもやっぱ、本の世界と違う。ほんものは、これまで何人かの人の最後を

*わたしにとって「情報」とは「わたし」がとらえた意味をもつものではなく他者のとらえ表現した意味付けをもつたものである。それに対して、わたしは「わたしが経験によって意味づけたことば」を重視する。

みてきたけれども、みんないろんな顔して死んでるなあ。そのたびにいろんな感情をおぼえる

人の命をとりあつかう医師となった今、兄は、以前よりも人を包み込むような愛と強さをもったように感じた。ひとりひとりの患者と向き合って、彼らの生を重んじるようになってから、兄は「人の生命力や治癒力がこんなにすごい力をもっとるものだとは思わなかった」という。その力は理論で治そうとする医学的知識以上に、もっと大きな不思議なパワーをもっているのだと。「ことば」もそうではないか。本の上ののった記号以上に、ひとによって生み出される「ことば」の力はひとの思いをゆるがし、世界の意味をとらえなおさせ、そして、人の生き方にゆさぶりをかける。

兄は、人は、一人一人の中で貴重な経験や価値観をもって死んでいくのだという。その生のなかで、「自分にしかみつけれない生」を体験して成長していくことが幸せだと兄は教えてくれた。

「医師」とは違う形で「教師」も人と向き合う。

「一人一人と向き合うことで、自分がいろんな価値観をしつたし、ほんまに、これまでの学問とは違うことばにできん感覚をくれた」

兄の医療の現場での経験そのものによって本や医学的な知識では、はかりしれない、大きな意味をもつてうまれかわったという。

「なんでかっていうとなあ、ひとりひとりの体っていうのはなあ、おんなじ物質ちがうんじゃ、みんな違う精神をもっとるけん。その人格すべてとぶつかりあったうえて、人として向き合うこと、それが体を完璧に治すこと以上に、俺らの精神にとっても患者の精神にとってもかえがたいもっと大事な、なんていうか、成長をもたらすとちゃうか」

3年前に実践の中で実際に人と向き合うべき研修医となってから、兄がひととしてなんだか大きくなった気がしたのは気のせいではなかった。ことばにできない感覚というが、その感覚、それが「知識」ではなく、「実践」の中で「わたしがとらえた経験、知識」へと発展していくのだろう。「研究」もそうだ。わたしも、「教室」という生きた人との交わりぬきに日本語教育を学ぶことはできないし日本語を学ぶこともできない。そして医師も教師も向き合っていくのは「人」であり「医学的な知識」ではない。「日本語」、あるいは「日本語教育」の「理論」「知識」そのものがわたしたちの求めているものではなく、むしろ「出会い」の中で思いをぶつけあ

い、体でふつかりあうなかで「わたしたちが成長していくこと」なのだと思う。そのなかで「知識」は再構築され絶えずつくられていく。

「そういった意味でいったら、患者の体の悪いところを治して、はいもとどおり…ではいかん。患者の见えない不安、患者の今の思い、それを患者といっしょにつきあっていくこと、そのほうがもっともっと大事ちゃうかなって思うけん、それがないとさ、おもしろないやん。あとのはのう、あんまり、自分が悩みすぎんこと、できんときはできん、人間やけん当たり前やろ、あんまりうじうじすんな。でもいつか、道がひらけるけんの。やけどおまえの不安にはつきあいとうない」

「えっ」

いつものとおりのわたしへのぶっきらぼうな発言の中にもわたしは大きな兄への尊敬を感じた。あきらかに人と接する毎日の中でこうした、「兄にとってのひとと医療」を築き上げていっている気がした。わたしも、人と交わるなかで、はじめて、「わたしにとっての日本語教育」が得られるのではないかと思う。「わたしにとっての日本語教育」という命題を与えられていよいよ「わたしは主体的にまなばなければいけない」というプレッシャーにおしつぶされそうになった。そして、わたしが自分の足で、歩んで発見していく日本語教育なんてわたしには無理だ、と不安を感じて目をそむけていた私は、「ひとり」で悩んでいた。

この兄との会話をとおして、わたしたち一人一人の人間という存在は、そんなに強いものではない、だからこそ他者との交わりがある。そのかわりの中でこそ、悩み葛藤しながらも「わたしらしく」学んでいくのだということをあらためて強く感じさせられた。

学びには不安や恐れはつきものだ。そこにいるものが価値観も経験も異なる他者だからこそ、葛藤や不安、疑問がいつもうまれる。しかし、そこで、立ち止まってしまっただけではいけないのだと思った。だからこそ他者と、「今」のわたしがいる状況をわかちあうことをとおして人は、実践的な学びを経験していくのである。

「研究」それは今わたしが立っている場所に恐れなく目をむけて一歩一歩足を踏み出して開拓していく営みである。それは、まるで人の人生もそうではないかなと思う。到着点、その先にあるわたしがどうなっているのかばかり考えては何もはじまらないと思う。「いま」をみつめ一歩一歩歩いていくその足取りの過程そのものが人生なのだから。そして、そこでであった環境での人との対話、そして、そこで変っていく自分をたえず真摯にとらえ、思考すること、そこに「わたしの問題

意識」そして「わたしのことば」は生まれていくのだろう。だから、わたしたち生きているひとりひとり全ての人が研究者であり、根源的に「学び」の姿勢をもっているのだと思う。誰でもにとって「わたしは研究者」なのだ。そして先生のいったとおり、それが「楽しい」とかんじさせるのが「研究」だと。わたしなりに解釈するなら、それは「研究」は同じ学びをする、共同の中で、ともにコミュニケーションをかわし、「ことば」で世界を編みなおす中で行われる「学び」なのだと思う。ひとりでは主体的にいきることもできず、研究もできない私たちは、「共同」だからこそ、「わたし」のしたい研究を見つけることができるし悩みや不安から、目をそむけずに、「他者との交わりの中で」そこから一歩進んで「楽しさ」に変えていくことなのである。

「わたしのことば」は「かかわり」の中で変容しつづける世界にぶつかり、その世界に対する好奇心や動機から、その世界をもっと知ろうという内発的な思考がうまれるときに、あるいはそこでの「わたし」をさぐるときに、内側から自然と生まれてくる。そういった「ことば」は生きている。それがわたしたちの心の底からふつふつと生まれてくる内発的な問いや答えだからだ。そして動機にも書いたように「わたしのことば」はまぎれもなく「他者との対話」と「内なる対話」の往還なしにはうまれるものではないのだ。

人と人が会おう場所、成長していく場所。そこには予定された知識、道のりがあるわけではなく、創造的に不断にうみだされる「生きたことば」がある。それが生きた教室や生きたことばをつくりだしていくのだろう。兄は医療の現場で、ただ、知識を実践するのではなくって「いろんな価値観」「いろんな人生をいきてきた人」とむきあい、「わたしの医療」を築き上げているのだろう。それが彼自身にも豊かな人間性をきずきあげていたように思う。

4. 多元的価値観にもとづく評価活動

卒業の日、研究室に思い切って行ってみた。先生に進学をあきらめようかなと相談した後だったのでとても勇気がいった。しかし、いざ入ってみると、いつもどおりの先生と先輩がいた。なぜか、「あれ、今までの不安はなにだったのだろうか」という気持ちになった。わたしはただひとりで悩んでいたのかな、と思った。不安や葛藤から学ぶ意欲や関心、好奇心からみずから遠のこうとしたのだった。

今回のわたしの悩みや経験をとおして立ち直ることができないと思っていた。しかし、この経験はよき試練となった。これをとおして、いかに「ひと」とのコミュ

ニケーションの中で学びや研究をすることの大切さを知ったか。「学び」とは、ひとりではできないものではなく「ひと」の中で「わたし」をさぐりつつ行うもの。「主体的」「能動的」「共同」ということばを今まで耳にしながら私自身が頭の中で理解しようとしていた。しかし、今回の経験は、それを私自身が身をもって感じる事ができた気がする。「主体性」や「能動性」をもってわたしが学ぼうとすることは「生きたコミュニケーション」「変わり続ける関係世界」の中での思考のゆさぶりの中ではじめて生まれるものなのだ。

そう考えてわたしにとっての「教室観」と「学習観」をとらえなおしてみよう。

ことばを学ぶ教室、いや「ことばの生まれる教室」には、コミュニケーションをとおして多様な価値観がつどい、多様な考えと、変容可能な知の中で思考をゆさぶられ、自己の中に葛藤や驚きがあまれるところであるべきだ。別の言い方をすれば「学び」とは「ことば」が内から生まれる場所にある。多様な価値観の中で人は葛藤や不安を感じたり、共感をおぼえたりする。そこにあるひととの違いや共感のあるコミュニケーションの中から学びへの「わたしの問題意識」があまれる。価値観の多様性、その差異こそがおのおのの認識にゆさぶりをかける。そこから「思考」、つまり内側からあふれてくる内発的な「ことば」があまれるのだ。それをとおして「ことば」が獲得されていく。その「ことば」はまぎれもなく「わたしのことば」なのである。わたしの「意味づけ」をとおして、「知識的事実」より厚みをもった意味深いものとして、たちあられてくる。

価値観の多様性との出会いについて思い出す対話がある。

「人を治すとか、よくするとか、それ以前にその人の病気との関わり方をみよつたら、みんないろいろやな。そこに人の価値観とか、考え方とかがかいまえておもしろい」

兄のメールにこうあった。人はみな、それぞれの経験と価値観を、人との出会いの中でさげあげていく。様々な経験によって、いろいろな仕事をしてきた人が集っている「病院」には、たくさんの人が運ばれる。兄は、そのようなさまざまな人とむきあって、「おもしろい出会い」をしたという。その「おもしろさ」とは、きっと兄が人を好きになり、人への医療を考え直すきっかけになったのであろう。

「教育」も人と向き合う営みである。しかし「教育」という営みは、ときとしてそういった価値観の違いや経験の差のある人の集まりを大きな権力によって統制され一元的な流れへと調整してきたと思う。なぜならこれまで私自身の「勉強」の環境は受験競争や知識の積み上げのなかでの孤独な勉強だったからだ。「孤独」など

けにコミュニケーションがなく当然のように「内発的な探究心」をかりたてられることもなかった。当然のように、テストの高得点や大量の知識の習得、それ自体が目的となっていた。「共同」ではなく「競争」だった。

東京にきてわたしにとって内側からうまれる関心や好奇心があったのはむしろサークルやバイトなど「ひとと出会う場所」だった。分厚い教育学の本、大教室での知識の習得はただ教職や単位という自分を飾る外側の塀をつくるだけだったかもしれない。つまり内なる自分を変革する学びが教育学部に通いながらもなかなか生まれず、教師という仕事への期待もうすれてしまっていたのだ。

「ひととの出会い」の毎日で、兄は人間的に豊かになっていた。実践的な医療の中で今までの本での知識とはまったく次元の異なる、大きな経験をしている。それこそ人間にとって大切な「学び」で「成長」だと思う。その中でひとりひとりの生きた価値観や人間性に出会い、「こんな価値があったのだ」と発見しているのだ。

「認められるために他者の価値基準に自分をあわせること」がわたしの「学習」を支配していた。しかし、本当に人間が豊かになっていくのは「新たな価値観の発見」とおして「わたし」がつくられる学びではないだろうか。

つまり「学び」「教育」の世界はひとつの「知識」「価値観」へと系統化されるべき場所ではないと思うのだ。大学で教育学部の大きな教室で、知識をたくさんつめこみ、「教育とは」という命題で、レポートをたくさん書いた。今思うと、その命題である「教育」ということばさえも「わたしの立場」から問うことがなかった。本からひっぱってきたことばを安易に引用していたのだ。

今経験をとおして「わたし」は考える。「学び」はひとりではできない。たくさんの人との多様な価値観との出会いのさなかにうまれる。わたしは、そこに生まれる真摯な問題意識から発信される思考に「わたしのことば」というものがうまれるのだと考える。言語教育の教室という環境には、そのたくさんの人との出会い、ぶつかりあい、葛藤があり、そこに思考と言語が生成されていくべきだとかんがえる。

「評価」とは。そういったことを考えるようになったのは、自分がいつも評価されつづけることからくるプレッシャーだった。無理をしてでも評価されようがなばってきた生き方をわたしは変えたかった。「わたし」を問い、「わたし」にとって大切な価値観を見つけながらの「学び」がしたかった。

多様な価値観の人同士のコミュニケーションに重点をおく教室での活動における評価方法が、目に見える形式的な基準、一元的な流れ、価値観によってなされるものではないことは確かだ。

ひとや、出来事、の絶え間ない変容の中で生まれる問題意識、そしてそこから「思考すること」でやっとはじまる「わたしの学び」とは決まりきった道があるわけではない。私たちひとりひとりが環境の中で自分を見つめなおして、そこでできひらいていくパイオニア精神をもつことだ。ならば、その評価とは、そこであらかじめ予定された知識、予定された答えをえたことを評価しうるものではない。評価するとは、あらかじめ予定された学習の方法にそって「この能力をえること」⇒こうすればよい（学習方法）⇒「できた」から高く評価されるルールにそった営みではない。むしろ、そこに集う学習者ひとりひとりが、知的探求活動をとおして今までになかった（価値観）（価値基準）をきりひらいていく。

「評価」とは「新たな価値観の発見」でもあると思うのだ。新たな「わたし」を発見したとき、今までみえなかった「わたし」を知ったとき、「わたし」に「新たな価値」をみいだしている。「評価」とは、多様な価値をもった「学び」を多面的な目で「発見」していく営みだ。その評価観点は、点や形式ではあらわすことができない。「ことば」でこそ表現され、実感される。意外なことかもしれない。ほかの人には最初理解されないものかもしれない。しかし、その価値を「ことば」で表現し共有するならどうだろうか。まわりにも学びの世界がぐんと広がるのではないかと思う。

また価値観の発見とその共有は、共同体の中に影響をおよぼす。他者もそれを理解し考える。そこに学びの新しい動きや方向性が生まれるだろう。創造的に新しく生成される「価値観の発見」はその環境に集うひとりひとりの「異なり」や「ずれ」からうまれる「ことば」の中でこそ「新たな自己」の発見から生まれ、そして「見つけた！」という学びの喜びをもってあらわれるのだろう。

さらに「共同」の中でこそある「多様性」が「主体性」や「能動性」をうみだすのは上にもものべたとおりである。その中で、それぞれの「わたし」が、内発的な動機付けから「学び」「新しい価値観を発見」する。その「価値観が」そこからの学習の方向付けや調整をおこなったり、反省的に自己の学習を見つめなおしていくことにつながる。それは過去から未来にむけて、動いていく力動的な営みでもある。固定化されたルール上をいくのではなく、今ここにはじまる探求だ。学びの道を見出し共有し、新しい学びの共同体を築き上げていく営みだ。

「評価」ということばに負のイメージをもっていた学生時代とは逆に、最近になって、その「評価」という言葉の意味のあみなおしをしている。それをプラスの方向にもっていきたい。「評価」が「学び」を豊かにするものならば・・・

考えてみれば「評価」しているわたしは日常にあふれている。音楽をきくとき、演奏するとき。買い物をするとき、人とどこかへいくとき、生活のすべてでいつも「今」のわたしを評価したり、ものを評価したり、たくさんのベクトルをもった評価を無意識的にしている。その無意識な心の営みはわたしの「行為」を方向付けている。たえず、評価は「行為」につきまとっているのだ。

「学ぶ」という「行為」と連続的に行われる評価。それは、テストや形式によって他者や権威のあるものから、一方的になされるべきものではない。均質化された方法や空間、時間ではなく、それは絶え間ない「行為」と連続して、さまざまなベクトルをもって、動的になされているものだ。問題はそれを自覚していなかったことだ。多くの教室で、それが形式的な活動として「付随」していたことで「評価」がテストや成績として固定的なものとして「おこなわれていた」。

動的な評価が「こころの中」からふつふつとわきおこり「行為」が調整される。その「思い」を「ことば」で、相互に交流させることで、「教室」という場所に、多元的な価値観の発見がおこり、「学び」を発見し、共同活動の大きな力がうまれるのではないかと考えているのである。

結論

わたしにとっての日本語教育とは、という命題を与えられたときからだろうか、大きなスランプにおちいていた。わりといつも一人でかかえすぎる私は、今回もひとりで悶々と悩んでいた。自信もなくて、まわりのみんなについていけないかな…となきそうになってしまっていた。同時にわたしは、その状態の苦しみをどうやってきりぬけるかという今思うと思考からの「逃げ」だった。しかし、ひとこと先生にメールをおくってみたことで、急に前向きになった。悩みに目をむけて思考してみよう。この悩みそのものが研究の発端となる、問題意識なのだから。

研究室に足を踏み込んだときに、暖かさを感じた。ひとのいるぬくもりを感じた。ようやく、わたしは自分をとりもどした。そして、兄との対話を思い起こしながらこのレポートをかいてみたのだ。その過程すべて、悩みも葛藤も、いろんなものをすべてふくめて「学び」だったのだとわたしは今思う。このように、「学ぶ」ことは予定もつかない道をたどるのだろう。情報のなかでさまよい、「わたし」の立場をみうしないがちであり、精神がゆれ、悩みが生まれる。しかし、そこで逃げるのではなく真摯に自分をみつめ「わたし」になぜを問いかける。そして、また「外なる対話」としての、人との対話や情報がそこからぬけだす道をあたえてくれる。そ

の問題意識から自然と思考がうまれるところから、「知的探求の旅」がはじまり、自然と「わたしのことば」がうまれるのだろう。

もう一度動機にもどってみよう「内なる対話」「外なる対話」との往還の中でひとと出会い自己を発見するたびだと・・・今考えてみると、その考えはかわっていないように思えるかもしれない。しかし、経験をとおして、ぐんとその意味に深みを感じる。「内なる対話」と「外なる対話」の往還とは、つまり「学びの共同体」の中でこそ「主体」をもとめ、「思考」することである。「わたしらしく共に生きること」とは逆にいうならば「共に生きる中でしかわたしらしきをもつことはできない」。そして、「出会い」とは実質的なひとや世界にぶつかっていくこと。それを大事にしなければいけない。そこにしか学びは生まれえない。その中で内発的に生まれる「思考」とおして「学び」「わたしのことば」を獲得していくのだ。

わたしにとって日本語教育とは、わたしの生きる道でもあり、「学び」であり、人との出会いの中で探っていく探求の旅だと思う。わたしは、今のこの場所や出会い、変化を真摯にみつめ、目をそむけることなく、そのたびそのたび「わたし」に戻って探求していくこと、そして、不安や葛藤の中でも「みんなの中でわたしらしく」一歩一歩、前進することで、この先にうまれていくものを大事にしていきたい。